

「子どもの推論」の理解し難さに関する一考察

— コーラ・ダイヤモンドの「現実の難しさと哲学の難しさ」の検討から —

杉田 浩 崇

(2012年10月2日受理)

On the Difficulty of Understanding Children's Reasoning
— An examination of Cora Diamond's "The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy" —

Hiroataka Sugita

Abstract: Philosophy for Children is an educational program developed for children in the United States in the 1970s. The program aims to develop children's ability to think critically, reflectively, and reasonably, and thus liberate them from hierarchies or power structures existing in society. However, according to some critics, children's voices may be understood only when they are treated as future autonomous citizens. We must draw attention not to how reasonable children's thoughts are, but to how our way of speaking for them becomes reasonable. This article focuses on the difficulty of understanding children's voices by examining Cora Diamond's paper "The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy." In it Diamond presents a distinctive interpretation of J. M. Coetzee's novella "The Live of Animals," which considered to be concerned with arguments in animal ethics. However, according to Diamond, the novella, by illustrating the difficulty of speaking for suffering animals—the problem that the protagonist is confronted with—teaches us how not to understand the Other's voice. Thus the teaching demonstrates a potential technique for understanding children's reasoning.

Key words: C. Diamond, M. Coetzee, philosophy for/with children, ethics

キーワード：C・ダイヤモンド、M・クッツェー、子どもの哲学、倫理

1. はじめに

1970年代にアメリカを中心に広がった「子どものための哲学」(Philosophy for Children：P4Cと略記)¹⁾は、子ども自身が世界との関係を哲学的に問うことを学校教育課程に取り入れた点で、子どもの発言を積極的に聴き取ろうとする教育実践だと言えよう²⁾。実際、ピアジェ流の発達心理学では認められなかった推論能力を子どもに認め、批判的思考力や合理的推論スキル、ケアの観点に立つ思考の涵養を行うことで、既存の規範や権力から子どもを解放することが目指されている。

ところが近年、P4Cを主導したリップマン(M. Lipman)の思想は、真理探究に資する科学的・分析

的推論を重視する点、問題解決のための道具として批判的思考を捉える点において批判されている(Biesta 2011; Vansieleghem 2011)。P4Cで認められる思考や対話の営みは、「我々が子どもたちに満たしてほしいと思っている役割、すなわち自律的・批判的・創造的で、コミュニケーション能力をもった市民に適う限りでの思考や行為によってあらかじめ規定されている。つまり、他なる可能性を排除してしまっているのである。」(Vansieleghem 2005: 20)

一方、もうひとりの主導者であるマシューズ(G. Matthews)の思想は、批判的思考を問題解決のための道具ではなく、世界について深みのある空想をしたり驚いたりする能力と捉え、子どもの「新しさ」や「他

者性」を重視した点で評価されている³⁾。だが、ヨハンソン (V. Johansson) によれば、それでもマッシュューズは子どもの合理性や能力の証拠を提示するだけで、子どもの声を聴き取る大人や教師の側に関わる、子どもの発言をいかに代理して理解するのかという倫理的な問いを問うことはしない⁴⁾。すなわち、「子どもを我々の実践へと調和させる (attuning) のではなく、我々自身を子どもの実践へと調和させ、……持続的に自分たちの調和を別のかたちにし (transform), 我々をして理性の共同体を改変できる自律的な存在へと成長せしめようような」(Johansson 2011: 368) 子どもの声に対する態度、いわば子どもの推論をまさに推論として受諾し、ともに共同体を作ろうと苦心する態度のあり様が問われるべきだというのである。

もちろん、そうした態度をとることは難しい。だが、この難しさの内実を直視し、受け入れていく技法こそ重要なのではないか。実際、ヨハンソンはこの難しさを、コーラ・ダイヤモンド (Cora Diamond) の論文「現実の難しさと哲学の難しさ (The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy)」をひとつの手がかりとして考察している。「現実の難しさと哲学の難しさ」は、クッツェー (J. M. Coetzee) の『動物のいのち (The Lives of Animals)』という小説を題材にして提起された論文である。『動物のいのち』はエリザベス・コストロ (Elizabeth Costello) という主人公が大学の講演会にて、動物の心について語るという小説である。そこでコストロは、動物屠殺のおぞましさを語る。コストロの語りは、これまで動物の権利論として論じられてきた動物倫理というテーマに関わっている。それゆえ、動物の権利論者として知られるシンガー (P. Singer) の解釈をはじめとして、『動物のいのち』は最初、動物倫理についての普遍的で合理的な言明を小説形式で提示したものと解釈された。しかしながら、ウィトゲンシュタイン研究者で知られるダイヤモンドの論文を皮切りにして、『動物のいのち』は哲学と詩の関係という古くからのテーマに結びつけられることになった。ダイヤモンドは動物倫理や倫理学一般を、合理的な推論だけで遂行することに慎重な立場をとる論者である。たとえば、ダイヤモンドはウィトゲンシュタインに示唆を受けて次のように述べている。

倫理における推論の根拠 (reasons) は、哲学自体あるいは美学におけるそれに似ている。それらは、「ある事実へと注意を向けさせ」、また「諸事実を並べて置き」、ときに諸事実を別々なところに動かす。推論の根拠は人の「ものの見方 (Anschauungsweise)」を変えうる。(Diamond 2001: 118)

こうした背景から、ダイヤモンドはコストロの語りを従来の解釈のように普遍的・合理的な言明に回収するのではなく、目の前の存在の声を理解し応答することの難しさとして捉える。したがって、ダイヤモンドの解釈と従来の解釈を比較検討することは、「子どもの推論」の理解し難さに臨むことの内実を解明することに繋がろう。しかし、ヨハンソンはダイヤモンドの解釈を詳細に分析していないため、この内実を明確にできていないように思われる。

そこで本稿は、ダイヤモンドの論文を手がかりに、「子どもの推論」の理解し難さに臨むことの内実を考察する。以下では、まずシンガーの『動物のいのち』解釈とコストロの直面する現実との相違を明らかにする。次に、ダイヤモンドの動物倫理に関する議論を紹介し、彼女の着想を明確にする。そのうえで、「現実の難しさと哲学の難しさ」における『動物のいのち』解釈を検討し、他者の声を代理し理解することの内実を示す。これらを通して、子どもの声をいかに代理して理解するのかという問いを、理解可能性と理解不可能性の両義性において捉えるための一視座を提示したい。

2. クッツェーの『動物のいのち』とその解釈—シンガーが読み落としたもの

『動物のいのち』は、プリンストン大学で行われたクッツェーのタナー記念講演 (1997-1998年度) を収録したものであり、ガットマン (A. Gutman) の序論と動物の権利論者シンガーをはじめとする4人のリフレクションが同時に収録されている。クッツェーは南アフリカ・ケープタウン出身の小説家であり、2003年にノーベル文学賞を受賞している。クッツェーの講演は独創的なかたちでなされた。タナー記念講演は例年哲学的なエッセイのかたちをとるのであるが、クッツェーの講演はフィクションのかたちをとったのである。その講演のなかでクッツェーは、オーストラリア出身の女性小説家であるエリザベス・コストロを主人公としたフィクションを語った。コストロは、クッツェーと同じように、アップルトン・カレッジに招かれ、講演をする。つまり、実際のクッツェーの講演は、講演のなかで講演を語るというメタ的な形式をとっているのである。

コストロは1日目に「哲学者と動物 (The Philosophers and the Animals)」, 2日目に「詩と動物 (The Poets and the Animals)」という二つの講演を行っている。そこでコストロは、食糧のために動物を処理する屠殺をホロコーストと類比させ、様々な詩や小説を用いることで、過剰と映るまでに動物の心を代理し語ろうとする。ホロコーストとの類比はコストロに同調しうる

だろう聴衆から反感の手紙を誘った。また、詩や小説を用いることは、その後の食事会であまり重視されることはなかった。

では、なぜコストロは、誤解を招きうるようなホロコーストとの類比を用い、また詩や小説といった題材を用いたのだろうか。理由は、次のコストロの言葉とシンガーの『動物のいのち』解釈から明らかとなる。

〔動物は、〕私たちが意識だと認めるような意識をもっていない。私たちが理解できる範囲では、歴史をもった自己の自覚 (awareness) はない。私が気になるのは、後に続けてよく言われることです。動物には意識がない、だから (therefore)。だから、何なのでしょう？だから、私たちは自分たちの目的のために動物を自由に利用してもよいとでも？だから、動物を殺すのも自由だと？どうしてなのでしょう？ (Coetzee 1999: 44= 2003: 74)

一方シンガーは、クッツェーのフィクションを用いた講演に対して、自らも娘との仮想的な会話というフィクションを用いてコメントを寄せている。シンガーは、コストロが動物の権利を擁護しようとしている点で正しい立場に立っていることを認めつつも、「人間と動物に関するラディカルな平等主義 (radical egalitarianism)」(Coetzee 1999: 86= 2003: 148) だと批判している。シンガーによれば、コストロは感情に訴えかけるだけで、理由を考えていない (Coetzee 1999: 88= 2003: 152)。シンガーにとって、動物はどう扱われるべきなのかという問題は、あくまで「利益の平等な配慮 (equal consideration of interests)」を原理として論じられなければならないのであり、動物 (たとえば、固有名をもったペット) との個人的な関係や動物への感情によって語られてはならないのである。

コストロとシンガーの立場の違いは一見、その主張がラディカルなものか、それとも特定の原理に基づいているかの違いであるように思われる。しかし、ダイヤモンドによれば、この違いは決定的である。違いの核心は、シンガーが「動物 (人間) はかくかくの存在である。だから (therefore)、しかじかに振る舞わなくてはならない」という「だから論証 (therefore-argument)」(Diamond [2006] 2008: 80= 2010: 122) を採用している点にある。

実際コストロは、人間と動物の関係をめぐる議論を行ってきた哲学の言語に対して懐疑的である。哲学の言語とは、コストロによれば、「動物はどんな魂をもつのか、動物は推論するのか、それとも逆に自動的に行動する生物なのか、動物が我々に関する権利をもつ

か、それとも我々が動物に関する義務を単に負っているだけなのか、これらを討論し、論争することのできる」(Coetzee 1999: 22= 2003: 33) 言語である。こうした言語は、シンガーが動物の権利を擁護するために、「利益の平等な配慮」という原理を採用するときに使っている言語にはかならない。コストロは、こうした哲学の言語の意義を認めつつも、受け入れられない。

この学識ある集団に受け入れてもらうための最善の方法は、支流の流れが大きな (great) 川に注ぐように、人間 (man) 対獣 (beast)、理性対非理性という偉大な (great) 西洋の言説に加わることだということはわかっているけれども、そんなことをすれば徹底した闘いを譲歩することになるのだと見越して、私のなかの何かが抵抗するのです。(Coetzee 1999: 25= 2003: 38)

コストロは、1日目の講演の後の夕食会で、学長から「でもコストロさん、あなたが肉食主義なのは、道徳的な確信 (moral conviction) からなのでしょう」と問われたとき次のように答えている。

自分の魂を救いたいからです。……私は革靴を履いています。革のハンドバッグももち歩いています。もし私があなただったら、尊敬しないでしょうけど。(Coetzee 1999: 43= 2003: 72)

ここでコストロが批判しているのは、動物の屠殺に関して何らかの主張をするのであれば、その主張は一貫した合理的な信念体系に支えられていなければならないという考えである。こうしたコストロの批判点こそ、ダイヤモンドがクッツェーの小説に読みこんだものであり、シンガーが読み落としているものなのである。

3. ダイヤモンドの動物倫理とそれに対する批判

3.1 普遍的な尺度としての「利益」に対するダイヤモンドの批判

次に、ダイヤモンドの動物倫理に関する議論を紹介し、その着想を明確にしておこう。

ダイヤモンドによれば、シンガーやリーガン (T. Regan) をはじめとして、動物の権利や肉食主義を主張する論者は、人間の権利を基礎づけている心的能力 (苦しみや痛み) に着目する。そのうえで、各々の心的能力に鑑みたときの「利益 (interests)」を比較考量するという原理を採用し、それを動物にも拡張しよ

うとする。ダイヤモンドは、彼らの論を次のように要約している。

もし、我々が「動物は理性的ではないので、我々は食糧のために動物を殺す権利をもっている」と言いながらも、理性が発達する可能性がなかったり、能力が失われていたりする人々の場合に同じことを言わないのだとすれば、我々は明らかに事例を類似したものとして扱っていない。……我々は利益をもつことの可能ないかなる存在の利益も平等に考慮するのでなくてはならない。そして、利益をもつ権利は、本質的に苦しんだり、喜んだりする能力に依存している。これこそ我々が明確に動物と共有できるものなのである。(Diamond 1999: 320)

このような議論に対してダイヤモンドが異議を唱えるのは、「利益」という一律の尺度によって倫理的な態度を基礎づけようとする論理である。すなわち、当該対象の利益はかくかくである、だから我々はしかじかという態度を取らなければならない、という論理（「だから論証」）である。確かに、普遍的な原理にしたがって倫理的な態度を基礎づけようとする試みは、これまで無視されてきた動物の権利を問いの俎上にのせる点で意義があった。しかし、そうした基礎づけの志向は、我々の感受性やその源泉である日常生活を看過してしまうのではないか。ダイヤモンドがクツツェーの小説に共感し、かつシンガーを批判していた背景には、このような問題関心がある。

ダイヤモンドによれば、シンガーのような動物権利論者は、雷に撃たれ、苦痛を感じずに死んでしまった人間の死体を食べることに、動物の肉を食べることとのあいだの差異を説明できない。我々の多くは人間の死体を食べることに言いようのない嫌悪感を抱くだろう。その嫌悪感は、動物の肉を食べることとは質的に異なっているように思われる。我々が人間の死体を食べない理由は、死後誰かに食べられることによって生じてくる苦痛に配慮することも当然あるだろうが、それよりむしろ人間の死体を食べることでそれ自体への苦痛のためである。

（もしあるとしても）我々は人間の肉を食べることの一言にすれば一何が道徳的に悪いのかということ、つま先を踏みつけることで他の人に引き起こされる苦痛こそが道徳的に悪いと見なすときの理由なのだ」と指し示すような仕方で説明 (elucidate) することなどできない。(Diamond 1991: 321)

にもかかわらず、シンガーのような動物権利論者は、人間の死体を食べることに動物の食用肉を食べることのあいだにある嫌悪感の差異を、心的能力やそれを基準とした利益の量差によって説明しようとする。

同様に、ダイヤモンドは売春を強制される少女の叫びや拷問に不正義さを感じることを、権利の言語 (language of rights) によって説明することは不十分だと主張する (Diamond 2001)。彼女はこうした説明を、ヴェイユ (S. Weil) のいう「不正義 (injustice)」と比較することによって明らかにしている。

ダイヤモンドによれば、権利の言語は次の二つの考えを前提にしている。すなわち、①権利は主張 (claim) したり、要求 (demand) したりできるものであって、請願する (beg) ものではない。権利を主張されている人は、何を求められているのかを把持する責務 (obligation) を負う。また、②権利は行為を制限する。人は他の人の利益を守るように努めなければならない。権利は①と②を前提にしているがゆえに、単なる同情の問題には回収されない。動物倫理においては、動物福祉 (animal welfare) ではなく、動物の権利 (animal rights) がより重要なものとなる。シンガーが「利益」を規準にするのはこのような理由からである。しかし、ダイヤモンドによれば、ヴェイユは「権利」の語源をローマ時代まで遡り、権利の言語が所有権 (property)、とりわけ奴隷の所有に結びついていると主張した。所有権と結びついた言語は、経済取引の文脈によく当てはまる。この場合、たとえば誰かになされた行為は、「ある人に対してなされた悪ではなく、そのシステム内の他の参加者と比べて、その人がどれくらい量のものを得たのか」(Diamond 2001: 121) ということによって評価されることになる。しかし、権利の侵害によってある行為の不正義さを規定しようとする権利の言語では、不正義さを十分に捉えきれない。

ここで批判されているのは、またもやシンガーの「利益の平等な配慮」の原理がもつ狭さである。普遍的な観点から利益を比較考量するという功利主義的な観点は、目の前の存在の「傷つきやすさ (vulnerability)」を感受し応答する我々の態度と、それを根底で支えている生活の諸形式を看過してしまう。

3.2 ダイヤモンドの動物倫理

では、人間と動物との差異をダイヤモンドはどのように捉えているのだろうか。ダイヤモンドが着目しているのは、我々の文化や慣習である。たとえば、犬の葬儀と生後二日の子どもの葬儀は同じではないだろう。シンガーの主張する「利益の平等な配慮」という原理は、こうした人間と動物との扱いの差異を捉えら

れない。ダイヤモンドは、名前で少女を呼ばずに番号で呼ぶような世界や、ペットを食べることが道徳的に悪いと判断されない世界を仮定し、そうした世界では「人間」や「ペット」の概念が我々の世界とはまったく異なっているだろうという。

ペットは食べ物ではなく、名前を与えられ家に招き入れられるし、ウシやリスに我々がふつう話すのではない仕方、話しかけられるかもしれない。換言すれば、人格の特徴のいくらかを与えられるのである。……こうした仕方でもペットを扱うことは、ペットがそのように扱われる際にもっている利益を認識するという問題ではまったくない。(Diamond 1999: 324)

我々のペットに対する扱いは、ペットが有している利益によるのではなく、実際の生活それ自体、あるいはそれを支えている文化や慣習に依拠している。人間は名前と呼ばれ、丁寧な葬儀で送られ、教育されるだろう。加えて、我々人間は動物の肉を中心に食卓を囲むのであって、決してその逆ではない。ダイヤモンドによれば、こうした扱いの差異は、人間とは何であるのかという生物学的な事実によって正当化されるものではない。むしろ、こうした扱いの差異はそれ自体「人間」という概念を規定しているものであって、人間生活の中心概念なのだという (Diamond 1999: 324)。

ダイヤモンドが一貫して主張しているのは、人間と動物の概念的な差異、およびその背景にある文化や慣習といった営みの存在である。そして、これらを看取することなく、普遍的な原理による基礎づけによって道徳的判断を規定しようとすることへの懸念である。しかし、見落としてはならないのは、ダイヤモンドが菜食主義者であるということである。つまり、ダイヤモンドは人間と動物は異なるのだから、動物をぞんざいに扱っても道徳的に悪くないと主張しているわけではないのである。では、人間と動物の差異を所与のものとして認めるダイヤモンドは、どのような動物倫理を展開しているのだろうか。

功利主義的な動物権利論者は、「利益」や「心的能力」などの客観的な規準に訴えかけることで、合理的な道徳的判断を提起している。しかし、彼らは結局動物には「愛 (love)」や関心がないのだとダイヤモンドは言いきる (Diamond 1999: 326)。功利主義的なアプローチはある尺度から一律の判断を導くことで、結局目の前の動物から目をそむけているのである。対してダイヤモンドは、動物を擬人的に描いた詩を引用しながら、「同胞 (fellow creature)」という概念を提示する。ここで提示されているのは、あくまで我々の人間生活と

いう所与を出発点としながら、その人間生活に特徴的な考え方 (conception) を動物に拡張していくことである。

また、ダイヤモンドはヴェイユの議論を動物倫理に拡張しようとする。彼女によれば、ヴェイユにとって、「他の存在、不正義の潜在的な犠牲者に対する愛のある注視 (loving attention) は不正義の悪を理解するにあたって本質的である」(Diamond 2001: 131-2) という。ここで提示されているのは、正義と同情 (compassion) の不可分性である。愛や同情の同胞への拡張は、一見合理的には思われぬ。だが、ダイヤモンドはこの非合理性にこそ、倫理の特徴を見出している。目の前の動物との活動や経験から不正義を見出し語りだすことを、ダイヤモンドは「話さなければならないという切迫感 (communicative pressure)」(Diamond 2001: 134) と呼ぶ。それは、ヴェイユが「権利」の言語によって語りえない不正義に声をあげたときに関わっていたものである。

不正義の語りを動物にまで拡張するためには話さなければならないのだといった切迫感は、動物の生 (life) の意義への応答であり、動物のいのち (lives) と善 (the Good) のあいだの結びつきが見えてしまうことへの応答である。(Diamond 2001: 136)

以上のように、ダイヤモンドの動物倫理は、「人間であること」を基盤とした道徳的感受性と、その源泉となる我々同胞の「傷つきやすさ」を出発点とする。そして、我々にできるのは、自分たち人間の生活を出発点として、想像力を働かせ、同胞である動物へとそれを拡張していくことである。

我々が非人間的動物と共有する傷つきやすさや有限性、そしてこの共有が可能にする同情 (compassion) は、倫理の問いのまさに中核である。—それは「単なる」思いやり (kindness) ではなく、正義なのである。(Wolfe 2008: 18= 2010: 47)

3.3 ウィトゲンシュタイン派動物倫理とその批判のあいだ—現実の難しさを直視する方へ

ダイヤモンドは、人間と動物の差異を出発点としていた。しかし、この出発点に対しては動物の権利論者からの批判が予想される。ところで、ウィトゲンシュタイン哲学を動物倫理に援用する試みは少なからずなされており、動物の権利論者から痛烈に批判されている。ダイヤモンドの動物倫理もしばしば、「ウィトゲンシュタイン派」として括られ批判されている。

だが、ダイヤモンドの動物倫理にはウィトゲンシュタイン派動物倫理にもその批判にも回収されない着想がある。以下では、ウィトゲンシュタイン派動物倫理とその批判を簡単に紹介したうえで、それらとは異なるダイヤモンドの着想を示し、他者の声を代理し理解することの難しさに関する彼女の考察へとつなげたい。

プレザンツ (N. Pleasants) によれば、動物権利論者は言語を欠いている存在に対して意味ある仕方では意識状態を帰属することなどできないという立場をウィトゲンシュタインに帰してきた (Pleasants 2006)。さらに、ウィトゲンシュタイン哲学に道徳的・政治的な保守主義を見て取ってきた。それゆえ、動物権利論者はウィトゲンシュタイン哲学を軽んじてきたし、反対に、動物の権利反対論者はウィトゲンシュタイン哲学を自らの論拠として使ってきたのだという。

実際シンガーは、言語能力と苦しむ能力のあいだのつながりを指摘するものとして、「おそらく影響力のある哲学者ルドヴィヒ・ウィトゲンシュタインの学説に由来すると思われる、一連のあいまいな哲学的思考の系列」(シンガー 2011: 36) を挙げ、次のように言う。

この説は、私たちが言語をもたない存在に意識を想定することは無意味であると主張する。私には、この立場は非常に信憑性が乏しいように思われる。あるレベルの抽象的思考には言語は必要かもしれない。しかし痛みのような状態はもっと原初的なものであって、言語とは関係ないのである。(シンガー 2011: 36)

ここでシンガーが念頭においている論者はおそらくリーヒー (M. Leahy) である。リーヒーは、ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」を方法論的視座として、動物の権利論者を批判した (Leahy 1991)。リーヒーによれば、シンガーに代表される動物の権利論者は、デカルト的な意識経験の理解を前提にしている。シンガーは認識論的に他者の意識が確かでないならば(懐疑論)、動物に対して意識を疑わないのは恣意的だということである。だが、リーヒーはウィトゲンシュタイン哲学を援用し、シンガーの主張の前提を批判した。すなわち、私的な心的対象を同定したあとで、正しい名前を当該の心的対象に張りつけるという、意識経験の描像を批判したのである。

リーヒーが立脚するのは、所与としての言語ゲームである。確かに我々の言語ゲームは、動物が見たり聞いたり感じたり、さらには選んだり計画を立てたりすることができることを認めるような営みである。しかし、それらは人間に対する言語ゲームとは異なる。リーヒーにとって、動物に適用される経験や振る舞いはあ

くまで「前言語的なプロトタイプ」にすぎない。一方、人間の場合、言語能力の獲得は生物学的な所与や前言語的な意識・感覚を存在論的に高次な経験や存在に変えることができるのだという。感覚や知覚の能力が恥ずかしさや嘆き、心配などと関係しながら意味となっていくのは、言語が媒介しているからである。動物は言語能力を欠いているがゆえに、その経験は無媒介的な出来事を超えていくことはない。動物は自己言及の語彙(「私」「私の」「あなた」「あなたの」など)を含む言語ゲームを学ぶことができないので、自己意識をもっていないし、もちえない。動物の経験はバラバラな現象的经验の集まりにすぎず、まとまりや統一に至ることはないのである。

以上のように、リーヒーは、ウィトゲンシュタイン哲学から、所与の言語ゲームを記述するという方法を得て、動物に対して営まれる言語ゲームと人間に対して営まれる言語ゲームを言語能力という基準で区分し、人間と動物を峻別した。

こうしたウィトゲンシュタイン哲学の理解は、人間と動物の差異を主張するダイヤモンドを批判するときには引き合いに出されている。たとえば、アルトラ (E. Aaltola) は、「ウィトゲンシュタイン派」としてダイヤモンドを捉えたうえで、ウィトゲンシュタイン派動物倫理が動物の意味するところを汲み取りきれていないと批判する (Aaltola 2010)。ダイヤモンドは、動物倫理の議論が心的能力に着目している点を批判していた。対してアルトラは、実際に心的能力を無視することはできないという。「もし我々が動物に対して曝されるようになるべきならば、我々は動物の心的能力に気づき、そうした心的能力が示している意味に自覚的になる必要がある」(Aaltola 2010: 138)。所与の言語ゲームに甘んじ、それに妥容を加えようような動物の意味を読み取ろうしない点こそ、ウィトゲンシュタイン派動物倫理、そしてダイヤモンドの限界だということである。

だが、ウィトゲンシュタイン派動物倫理に対する批判は、たとえリーヒーに対する批判としては妥当であるとしても、ダイヤモンドに対する批判にはなっていない。というのも、アルトラはダイヤモンドの提起する問題を十分に汲み取れていないからである。この点を見て取るために、アルトラのクツツェー解釈を見てみよう。なぜなら、アルトラの解釈はダイヤモンドの解釈とほぼ軌を一にしていながらも、決定的な点で異なっているからである。

アルトラは、コストロ (クツツェー) の動物倫理に三つの特徴を見て取っている。

①コストロの説得の仕方は理論や原理によってではなく、詩によってである。アカデミックな言語は理性

を理想とした人間中心主義的な意味に満ちている。そのため動物への感受性が忘却されてしまう。コステロはカフカ (F. Kafka) のレッド・ペーターを引用している。ペーターは科学者によって連れてこられた霊長類である。ペーターは語学を身につけ、科学者の前で雄弁に自らの経験を語る。しかし、コステロの講演もペーターの講演も聴衆には理解されない。アルトラは、彼らの講演を理解できないのは、聴衆が人間中心主義的な言語を当然としているがゆえに聴き取れない (listen) からなのだという。詩はこうした言語では汲み取れないものを語ろうとする試みの結果である。

②コステロの語りは、普遍的な視点から提示される理論ではなく、個人の性格 (personal character) に着目する点において「徳倫理学 (virtue ethics)」の様相を帯びている。コステロが記述しているのは、日常において動物屠殺が行われているにも関わらず、動物が苦しんでいることを見ようとしないうる大衆に対する驚きである。アルトラによれば、「典型的には無知 (ignorance) は道徳的責任の外側に位置づけられる (我々は知らないものに対して責任を負っていない) けれども、クツェーの登場人物は知らないことに対しても事実上責任を負っていると主張している」(Aaltola 2010: 123)。このような無知の状況に対して、どのように応答するのか。動物の客観的な特性や利益を基準として判断してきた動物倫理に対して、コステロの動物倫理は「よき人になる」という個人の性格に関わる側面を強調しているのである。

③性格への着目は、推論よりも「感情 (emotion)」や「共感 (sympathy)」、想像力 (imagination)」を強調する。アルトラは、こうした強調がワイトゲンシュタイン派動物倫理に抗するものなのだという。というのも、ワイトゲンシュタインは、「たとえライオンがしゃべったとしても、我々は彼を理解できないだろう」(Wittgenstein [1958] 2009: §327= 1976: 447) と言っているからである。対してアルトラは、コステロの考えを次のように捉えている。すなわち、「ライオンはしゃべることができないのではなく、人間が正しい仕方で聴かないがゆえに沈黙したままなのだ」(Aaltola 2010: 125)、と。この点は、コステロがネーゲル (T. Nagel) の『コウモリであるとはどのようなことか』を批判的に捉え、コウモリの心がわかるかと述べている箇所に示されている。アルトラによれば、「動物は語るができるのか」という問いではなく、「動物であるとはどのようなことか」という問いは、我々の同情と想像力を喚起するのであり、そこにおいて詩が重要な機能を発揮する。

①②の特徴はダイヤモンドの解釈と共鳴的である。問題は③である。ここでアルトラが主張したいのは、

ワイトゲンシュタイン派動物倫理が「動物は語るができるのか」と問い、言語ゲームの所与性から否定的な解答を与えているということだろう。そして、動物の意味を読み取ろうとしない批判を加えるのである。だが、ダイヤモンドはまさに動物の意味を読み取ることの限界性に直面し、その一歩手前で独自の動物倫理を展開しているように思われる。すなわち、ダイヤモンドには動物の言葉の意味を代理して理解することへの慎重さが見て取れるのである。この点こそ、肉食主義を採りながらも合理的な動物倫理を語らないコステロ (ダイヤモンド) の態度、理解可能性と理解不可能性の両義性において他者の声に臨むことの難しさを示しているのではなからうか。以下では、「現実の難しさと哲学の難しさ」を検討することで、この点を明らかにしたい。

4. 「現実の難しさと哲学の難しさ」読解

「現実の難しさと哲学の難しさ」はもともと他者の心に関する懐疑論についてアメリカの哲学者カベル (S. Cavell) が展開したワイトゲンシュタイン解釈と、『動物のいのち』に見られる問題構成を、哲学と詩との関係というひとつのテーマのもとで論じたものである。したがって、「現実の難しさと哲学の難しさ」は動物倫理だけでなく、他者理解の難しさの内実を考察したものとしても読まなければならない。

ダイヤモンドはまず、既に死んでしまった6人の若者の笑みが映る写真に対して、怖れおのくことを扱ったヒューズ (T. Hughes) の詩を取りあげる。すなわち、既に死んでしまっているにもかかわらず、目の前の写真では笑っているという相矛盾した現象に当惑する感受性を取りあげるのである。一見、この写真を見ることには何ら困難はない。我々は何の困難も感じずにその傍を通り抜けることができる。対してダイヤモンドは、この困難に直面する例として、ある子どもを取りあげる。その子どもは写真のなかに映っている一人の若者の孫である。子どもは問う。「おじいさんが死んでいるのなら、どうしておじいさんは笑っているの?」、と。人は答えるだろう。「写真をとったときおじいさんは生きていた。写真をとったあとで、おじいさんは死んでしまったのだよ」、と。つまり、周囲の大人は難なく通りすぎる困難に、この子どもは当惑しているのである。

このとき、子どもは言語ゲームを教えられつつある。そして、そのゲームのなかでいかにして物事が語られるのかを理解するにいたるとき、子どもは自

分の問題がいかにして消え去っていくのかを示されるのである。子どもが問題を見て取る視点は (the point of view), いまだそのゲームのなかには存在しない。(Diamond [2006] 2008: 45= 2010: 82)

そのうえで、ダイヤモンドは詩人の語る視点を、もはや言語ゲームのなかで語ることができなくなった子どもになぞらえる。ここでダイヤモンドが捉えようとしているのは、「現実にある何かを、それを思考しようとするに抵抗してくるように思われる経験、あるいはそれが説明不可能であることに痛みを覚えるような経験」(Diamond [2006] 2008: 45- 6= 2010: 82) であり、彼女はそれを「現実の難しさ (the difficulty of reality)」と呼ぶ。

クツェーの描くコストロは、まさにこうした「現実の難しさ」に直面している一人の女性として捉えられなければならない。ところが、ガットマンやシンガーはコストロが「現実の難しさ」に直面しているという事実を見落としてしまっている。

エイミー・ガットマンは、クツェーが人間は動物をいかに扱うべきかという倫理的な課題 (issue) に直面し、フィクションの枠組みのなかで、この課題を解決するひとつのやり方を支持するような論証 (arguments) を提示しているのだと見なしている。ピーター・シンガーもまた、クツェーがフィクションの枠組みで論証を提示することに努めていると読む。(Diamond [2006] 2008: 48= 2010: 85)

彼らはコストロの訴えを、倫理的な課題に関する論証だと解釈する。だが、そのように解釈してしまうことによって、コストロが現実の難しさ直面し、傷ついているという事実は、「一連の倫理的な課題の解決に関する考えを (大いに想像力を刺激する仕方) で述べるための工夫以外の意義をもたなくなってしまう。」(Diamond [2006] 2008: 48- 9= 2010: 86) ダイヤモンドによれば、こうした解釈ではコストロが自身について、「私は心の哲学者ではなくて、学者たちの集まりで自分の傷をさらけ出しながらも、それを表には出していない動物なのです。私は傷を服の下に隠しています。けれども語る言葉のすべてで、その傷に触れています。」(Coetzee 1999: 26= 2003: 40) と言っていることを十分に組みつくせない。次のダイヤモンドの指摘は、『動物のいのち』の核心についている。

講義のなかにひとりの傷ついた女性を見て取るならば、彼女を傷つけているもののひとつは、まさし

く、「我々はどうに動物を扱うべきか」が「倫理的な課題」であるという、自明視され問われることのないありふれた思考様式であり、彼女はこの課題についての論争に貢献している、あるいは貢献しようとしているのだらうと解釈する知識である。

(Diamond [2006] 2008: 51= 2010: 89)

実際、コストロは小説のなかで孤立していく。聴衆である学者たちや息子の妻の無理解はまさしく、コストロの訴えを誤解する人物として描かれていると言える。

では、ダイヤモンドはこうした洞察をカベルの哲学とどのように結びつけているのか。結節点は、シンガーやガットマンに代表されるように、哲学が動物という他者の現実を論証のなかに取り込んでしまうときに、「現実の難しさ」を捉え損ねている点にある。カベルによれば、他者の心に関する懐疑論者、すなわち私は苦しんでいるかもしれないの自分の苦しみがまったく知られたり気遣われたいしないという、ぞっとするような何かを正しく認識しようとする哲学者は、自ら立てようとしている問いから逸れてしまっている。

そうした哲学者の理解は逸らされている (deflected)。哲学者が哲学的懐疑論の言語で考えたり、考えなおしたりするとき、課題は逸らされるのである。(Diamond [2006] 2008: 57= 2010: 95-6)

ダイヤモンドがカベルの哲学に見出すのは、この「逸れ (deflect)」という着想である。動物倫理や他者の心に関する懐疑論において、哲学は問題となっている現象を何とか把握しようとして、様々な論証を試みる。だが、ダイヤモンドによれば、「哲学的論証において問題となる困難 (hardness) は、現実の難しさ (difficulty) を正しく理解する (しようとする) ことの困難ではない」(Diamond [2006] 2008: 58= 2010: 97)。現実の難しさが難しい所以は、日常生活に対して現実が抵抗してきて、それを把握しようとするれば自身のものの見方が変更を迫られる一方で、その現実を概念で捉えようとするときできないという点にある。カベルによれば、懐疑論者も反懐疑論者も不可解な他者に出会うという実存的な経験を問おうとしながら、結局他者の心に関する確実な知識はありうるか否かという認識論に関わる論証へと「逸れて」しまっている (Cavell [1969] 2002; cf. 杉田 2010)。同様にダイヤモンドは、動物の権利を擁護する論者 (シンガーやリーガン) も認めない論者 (リーヒー) も、動物の扱いに対する不正義を捉えきれていないのだというのである。そして、ダイヤモンドはカベルの哲学から次のよ

うな示唆を導く。

私たちが経験を言葉にする（しようとする）とき、言葉は我々を失望させる、あるいは我々が言葉にさせようと思っていることをしない。……しかし、私が要求することを言葉が実行するには言葉はあまりに弱すぎるように見えるからといって、ここでの非力さ（powerlessness）の経験がある種の文法的な誤りと呼びますということが示されるわけではない。（Diamond [2006] 2008: 67= 2010: 107）

子どもや動物の声を聴き取って、それを何らかのかたちで分類・秩序づけ理解しようとするとき、うまく言い表し難いような経験がある。また、その経験を他者に伝達しようとしたとき、合理的な推論に訴えかけて論証するのはどこか「逸れて」しまうような感じがある。しかし、そうした場合に言葉が非力であるからといって、それは文法的な誤りを意味しない。我々が受け入れるべきなのは、「私が理想的な場所と見なすもののなかに立っていないということ」（Diamond [2006] 2008: 72= 2010: 112）である。

事態は動物倫理においても同様である。シンガーは動物の心的能力などを根拠として、動物の権利論を展開する。一方、レーヒーは所与の言語ゲームを拠り所にして人間と動物の差異の根拠を言語能力に求める。いずれも、理想的な場所から課題を解決しようとするものだとと言える。それに対してダイヤモンドがコストロに見出すのは、自身と同じく傷つきやすい同胞に対する不正義に憤りながらも、自身のそれまでの見方を変更せざるをえず、さらに自身の直面する現実を言葉で捉えようとするれば他の人の無理解に直面するという事態である。屠殺の不正義を訴えながらも革のハンドバッグをもっているという一見矛盾したコストロの生活や、徐々に孤立して憔悴していくコストロの姿は、「現実の難しさ」を目の前にして、「逸れる」ことなく思考することの一事例を示している。

以上のことをふまえれば、ダイヤモンドの主張をレーヒーに代表される「ワイトゲンシュタイン派」として捉え、動物の言葉の意味を読み取っていないと批判することは早計と言わざるを得ない。ダイヤモンドの眼目は、「現実の難しさ」に直面しながらも、それを言葉で言い表そうとするとそこから「逸れて」しまうという事態にいかに向き合うかということである。おそらく、ダイヤモンド（コストロ）が肉食主義者でありながら、動物の心をそれ自体として語ろうとしないのは、そのように語ることで「現実の難しさ」から「逸れて」しまうと考えているからであろう。だから

こそ、我々人間の生活形式を出発点にして、同胞へと想像力を拡張していくことをダイヤモンドは自身の動物倫理の核に据えるのである。

5. おわりに

「子どものための哲学」は、ピアジェ流の発達心理学では見落とされてきた子どもの発言を、真理探究に資するものと捉え、批判的思考力や合理的推論スキルの涵養を目指した。しかし、そうした取り組みは有用な市民という目的に合う仕方でも（あくまで大人や教師にとって理解可能となる仕方でも）、子どもの思考を分類し理解することだと批判されている。

対して本稿では、子どもの声を代理して理解することの難しさの内実を検討した。『動物のいのち』の解釈をめぐる動物権利論者とダイヤモンドの解釈の違いは、他なる存在を理解可能とする手前に留まって逡巡するコストロの姿を明らに出す。ヨハンソンはダイヤモンドの議論や児童文学から、子どもの声を「推論」として受け入れることと、それに伴う「大人の教育（education of grown-ups）」の意義を導き出そうとしている。「児童文学は我々の理性の安定性に挑戦し、子どもに一定の仕方では応答しようとする我々の傾性を問いに付す」（Johansson 2011: 364）ことで、我々に変容を迫るといっているのである。これに加えて本稿は「現実の難しさと哲学の難しさ」を詳細に検討することで、「だから論証」を求めることによって現実の難しさから「逸れて」しまうことの危うさと、「逸れる」ことなく向き合うひとりの女性の技法を示した。我々は理想的な場所から子どもの声を聴き取ることをあきらめなければならない。だがそれは沈黙することではない。当の技法が示唆しているのは「語りうるもの」に対して、「語りえないもの」を対置することではない。むしろ、そこで示唆されているのは、言葉の非力さを受諾（acknowledgement）しながらも、「話さなければならないという切迫感」に駆られて目の前の動物や子どもの声を不断に語りなおし、伝達しようとする営みの重要性である。

だが、本稿の試みはいまだ十分とは言えないだろう。批判的思考や合理的推論スキルの向上を暗に志向しながらも、子どもと語り対話しようとするP4Cの実践のなかに、本稿で示した技法が（痕跡として、否定性として）介在しているのかもしれない。だとすれば、「我々の推論（「だから論証」に合う合理的推論）」と「子どもの推論」、理解可能性と理解不可能性の結節点を探ることが必要となろう。さしあたり、アスペクト転換の語り難さに関するワイトゲンシュタインの断章や、合理的推論における媒介や中辞の役割に関す

るブランドム (R. Brandom) あるいは田邊元の考察が手がかりになると考えている。今後の課題としたい。

【註】

- 1) 「子どものための (for) 哲学」はバターナリズムの印象を与えるため、「子どもとともにする哲学 (Philosophy with Children)」と呼ばれることもある。
- 2) P4Cの歴史的な背景や経緯については、Vansieleghem & Kennedy 2011を参照。
- 3) ビエスタ (G. Biesta) は、アレントの「新しさ」や行為概念に着目し、他者性や差異への曝され (exposure)、知ることではなく知らないことの重要性を説いている (Biesta 2011)。また、ストーム (T. Storme) とフリールヘ (J. Vlieghe) はアガンベンの「無能 (impotent)」を手がかりに、生涯学習社会の有用性に回収されがちな批判的思考力や問題解決能力を批判的に検討している (Storme & Vlieghe 2011)。
- 4) 「私はマッシュューズの論証は誤解だと思う。単に子どもの理性的な能力、あるいはその能力を提示する子どもの力の問題ではない。事実、理性を単に能力として語ることは混乱しているように見える。むしろ我々は子どもを人間として、合理的な会話のパートナーとして受諾するべきなのである。」 (Johansson 2011: 365)

【引用・参考文献】

- Aaltola, E., 2010, "Coetzee and Alternative Animal Ethics," A. Leist & P. Singer eds., *J. M. Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature*, New York: Columbia University Press, 119-44.
- Biesta, G., 2011, "Philosophy, Exposure, and Children: How to Resist the Instrumentalisation of Philosophy in Education," *Journal of Philosophy of Education*, 45 (2): 305-19.
- Cavell, S. [1969] 2002, "Knowing and Acknowledging," S. Cavell, *Must we mean what we say?* 2nd ed., Cambridge: Cambridge University Press, 238-66.
- Coetzee, J., 1999, *The Lives of Animals*, Princeton: Princeton University Press. (=2003, 森祐希子・尾関周二訳『動物のいのち』大月書店。)
- Diamond, C., 1999, "Eating Meat and Eating People," C. Diamond, *The Realistic Spirit*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 319-34.
- , 2001, "Injustice and Animals," C. Elliott ed., *Slow Cures and Bad Philosophers: Essays on*

- Wittgenstein, Medicine, and Bioethics*, Durham & London: Duke University Press, 118-48.
- , [2006] 2008, "The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy," S. Cavell, C. Diamond, J. McDowell, I. Hacking & C. Wolfe, *Philosophy and Animal Life*, New York: Columbia University Press, 43-89. (=2010, 中川雄一訳『動物のいのち』と哲学』春秋社, 79-131。)
- Johansson, V., 2011, "In Charge of the Truffula Seeds': On Children's Literature, Rationality and Children's Voices in Philosophy," *Journal of Philosophy of Education*, 45 (2): 359-77.
- Leahy, M., 1991, *Against Liberation: Putting Animals in Perspective*, London: Routledge.
- マッシュューズ, G., 1996, 鈴木昌訳『子どもは小さな哲学者 (合本版)』新思素社。
- Pleasant, N., 2006, "Nonsense on Stilts?: Wittgenstein, Ethics, and the Lives of Animals," *Inquiry*, 49 (4): 314-36.
- シंगाー, P., 2011, 戸田清訳『動物の解放 (改訂版)』人文書院。
- Storme, T., & J. Vlieghe, 2011, "The Experience of Childhood and the Learning Society: Allowing the Child to be Philosophical and Philosophy of Childish," *Journal of Philosophy of Education*, 45 (2): 183-98.
- 杉田浩崇, 2010, 「言語ゲームにおいて表出される〈内面〉の位置—重度障害児とのコミュニケーションの可能性から」『教育哲学研究』102:20-38。
- Vansieleghem, N., 2005, "Philosophy for Children as the Wind of Thinking," *Journal of Philosophy of Education*, 39 (1): 19-35.
- Vansieleghem, N., & D. Kennedy, 2011, "What is Philosophy for Children, What is Philosophy with Children: After Matthew Lipman?" *Journal of Philosophy of Education*, 45 (2): 171-82.
- Wittgenstein, L., [1953]2009, "Philosophy of Psychology: A Fragment," L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker & J. Schulte eds. & trans., Oxford: Blackwell. (=1976, 藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店。)
- Wolfe, C., 2008, "Exposures," S. Cavell, C. Diamond, J. McDowell, I. Hacking & C. Wolfe, *Philosophy and Animal Life*, New York: Columbia University Press, 1-41. (=2010, 中川雄一訳『動物のいのち』と哲学』春秋社, 29-75。)